

御木宏美

illustration

しおべり由生

楽園の

ポルノグラフィティ



楽園のポルノグラフィティ

《立読み版》

御木 宏美

イラスト しおべり 由生

クアラ・ルンプールのクアラとは、マレー語で『水系と水系が交わる場所』を意味する。その名前のとおり、クアラ・ルンプール国際空港は、東南アジアを旅する者の基点である。アジア各国はもとより、オセアニア、中東、さらにはヨーロッパからも国際線が乗り入れる。ある者はここで国内線に乗り換えてマレーシア各地へ、またある者は国際線を乗り継いで別の国へ。クアラ・ルンプール国際空港は、世界中の人種、ビジネスマンから観光客、若者から年寄りまで、あらゆる人間が交わり合う。

乗り継ぎ客のために、クアラ・ルンプール国際空港には、国際線のゲートがあるサテライト・ビルにトランジット専用のホテルが併設されている。

そのエアサイド・トランジット・ホテルのロビーのソファに、ふるやあつし古谷篤志は父親のてつ哲と並んで座っていた。

哲は三十八歳。悪路を時速百二十キロ以上のスピードで疾走するラリーレースの四輪ドライバーで、一年中、世界各地を転戦している。身長は日本人のその年齢の男性にしては長身の百八十四センチ。過酷な気象条件の下で褐色に焼けた肌。肉体は鋼のように全身が引き締まっている。道なき道を高速で走るラリーカーのドライビング・シートはバーテンが振るシェーカーのようなものだ。短めの髪は人工的な手がまったく加えられておらず、色も黒。目つきも鋭い。しかし、人相は悪くない。荒削りな風貌だ

が男前である。服装は焼けた肌に映える白いTシャツに、太腿や尻が白く色落ちするまで穿き込んだブルージーンズ。アクセサリーの類は一切つけてない。いたってシンプルな格好である。

そんな哲は篤志にとって自慢の父親であるとともに、もともと尊敬する男であり、憧れであり、同時に近ごろでは少し煙たい存在でもある。息子というのはある程度の年齢になると、親父を超えたいと思うものだ。

篤志は十七歳。長身の父親の遺伝子を継いで身長は百八センチ。顔立ちも身体つきも、髪型から肌の焼け具合まで哲によく似ている。ちょうど哲を一回り小さくした感じだ。哲は高校三年生のときに百八センチあったと言っている。今の篤志と同じである。篤志もまだ成長途中で、あと数センチは伸びるだろう。男は二十五歳の朝まで伸びるとも言われている。最終的には哲を追い越すかもしれない。篤志もそれを願っている。一方、褐色の肌は篤志の場合、マリンスポーツが理由である。しかし両者の違いはそこだけで、服装も偶然だが、下はこれまた父と同じようなジーンズに、トップスはオーストラリアで一番人気のバンドのロゴがバックにプリントされたダークグレーのTシャツ。見知らぬ者が見ても一目で、二人が父子だとわかる。篤志の左手の小指にはシルバーのカレッジ・リングがはまっていた。篤志はオーストラリアのパスで寮生活を送りながら現地の高校に通っている。

二人の足元にはパンパンに膨らんだバックパックが二つ並んでいる。

サテライトは「森のなかの空港」をコンセプトに作られており、あちこちに木々が配され、緑豊かで、吹き抜けの天井から自然光が降り注ぐ。トランジット・ホテルのロビーも、まるでリゾート・ホテルのような静けさと安らぎが用意されている。ソファのかけ心地もいい。トランジットを待つには快適な空間である。

そんななか、哲は先ほどからしきりにサテライトの方向を気にしている。

篤志はうんざりと言った。

「いいかげんにしろよ、親父」

「黙れ」

不機嫌な声で答えて、哲はいらいらと足を踏み鳴らしながら、また左手にはめたタグホイヤーの自動巻クロノグラフに目をやった。そして憎々しげに舌を打つ。

「まだ二分しかたってないのか。ったく、この国は時間の進み具合が狂っているんじゃないのか」

篤志は呆れた。

時刻はマレーシア時間で午後四時。篤志と哲はすでに五時間、ある人物の到着を待つて、このトラン

ジット・ホテルにいた。その人物と合流して、一緒にここから国内線に乗り継ぐ予定だった。先方の到着予定時刻は四時。フライトが遅れているというアナウンスは入っていない。まもなく着くであろう。にもかかわらず、哲はずっと、いや、昨日、パースに篤志を迎えに来たときからこの調子なのだ。

その人物との再会を哲は心待ちにしている。なにしろ十八年ぶりの再会である。篤志はその人物に会ったことはない。しかし、哲がどれだけ会いたがっていたかは知っている。

それにしても、だ。

※続きは製品版でお楽しみ下さい。

楽園のポルノグラフィティ

《立読み版》

発行日 2011年9月1日

著者名 御木 宏美

イラスト しばへり 由生

発行所 【MILK-CROWN】

株式会社水晶院

<http://www.milk-crown.net/>

(C) Hiromi Miki 2011

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。